

仏教の智慧とエコロジー的意識

——実践の領野を探る

ルベン・アビト

前川健一 訳

深刻な生態学的危機に直面している現代のグローバル社会に対して、仏教が提供できるものを考えるという時、自然とわき上がる疑問は「どの種類の仏教なのか？」というものである。換言すれば、二千五百年に及ぶ仏教の歴史を通観し、この精神的・文化的・宗教的な伝統（というより諸伝統の系統群というべきか）を俯瞰する時、私たちの眼に映るのは仏教の多様な形態であり、それらは教理的立場、儀礼行為、宗教的实践に関する規定、倫理的指針などにおいて種々様々である。

上掲の疑問から浮かび上がるのは、次のような潜在的な問題である。すなわち、地球家族に迫る問題群に關して「仏教徒として」特別に貢献できることを考える際には、仏教「一般」に關して当たり障りのない発言をして、それによつて意見交換を無駄なものにすることを避けるために、どの仏教伝統が参照されているかを特定する必要があるということである。この点に關して、神学者のハンス・キュングは、「パラダイム・シフト」という概念を援用して、一個の宗教伝統

内における信仰と実践の様々な配置を一覧する場合に役立つ枠組みを提示している。キュングは仏教の中で六つのパラダイム・シフトを析出している。(1) ゴータマと彼の信奉者たちによる初期仏教のパラダイム、(2) 出家僧団が確立した後の上座部(テーラヴァーダ)のパラダイム、(3) 瞑想志向(禪)、信仰志向(浄土)、行動志向(法華)といった仏教実践の諸形態に分化した大乘仏教のパラダイム、(4) 金剛乘(ヴァジュラヤーナ)の密教のパラダイム、(5) 二十世紀の倫理志向的・社会参加的なパラダイム、(6) 欧米的な近代の諸価値と世界観に接した緊張から生まれるポストモダンの仏教のパラダイム(Küng 2003)。

エコロジ的な意識に対立する諸要素

初期仏教の經典を読むと、次のような疑問が出てくる。パリリ經典の記述に見出される教理内容や宗教実践の指針は、はたして生態学的に生存可能な世界観や生き方を支持するもののだろうか? 聖典や史料を瞥見する限り、「それは見えない」と答えるのは容易で

ある。

インドで誕生・発展し、スリランカその他のアジア諸国に伝播した仏教が目指したものは、現世の生存における内在的な不充足から人間存在を解放することであった。パリリ聖典に見出される現実観や宗教実践の指針は様々な説明されるが、それらが強調しているのは、このメッセージである。その中心にあるのは、ブツダの教えに随順し、涅槃(ニルヴァーナ)の獲得に向けて、精神的訓練の道を歩むことである。それ故、これは、エコロジ的な意識や行動それ自体を、程度の差はあれ、支持することを訴えるメッセージとは言えない。

生死の円環(輪廻)は、ヒンドウー的世界観において、地獄・餓鬼(亡霊)・畜生(動物)・修羅(悪神)・人・天(神)というそれぞれの生き物がある六つの領域として理解されている。この輪廻に捕らわれた生き物たち(衆生、有情)は、解放されるべきものと考えられていた。この文脈では、樹木や山、岩石や河川といった、文字通りの自然世界は、衆生を輪廻の中にとどめる「容器」・

「環境」と考えられていた。こうした区別によって、この容器の中にいる衆生にとつての解放を求める関心の領域の外側に、「環境」は取り残されることになった。

ヒンドゥー的伝統から継承され、仏教文献に入り込んでいく、時間と歴史に対する諸見解が示すのは、数えきれないほど長い時間を単位として物理的世界の生成・維持・破壊が起こるという円環的な見方であった。こうした世界観によって、地上での生命の破壊は、宇宙が経る過程の内在的本質の一部と見られる。それは、単に認識して甘受しなければならぬというものであり、それ故、それ自体としては関心の対象とはならないのである。

大乘仏教において、般若経（智慧についての經典）は、しばしば「空虚（emptiness）」と訳される「空」の概念を軸としている。これは、二つの方向性を持っている。正しく理解されれば、この世界のあらゆるものの相互連関を明かす教義ということになるが、同時に、現世ならびに現世に結び付いたあらゆるものを「夢幻泡影」（金剛般若経）と見なす解釈にも力を貸す。こうした、現

象的存在が本質的に幻のようなものであるという見方は、この現世で進行していることに対する能動的関心を支えるものとはならないだろう。

もう一方の大乘仏教の展開として、浄土教がある。こちらは、東アジア（朝鮮、中国、日本）で広く受容された。阿弥陀仏の極楽世界（浄土）への往生を中心とする教義を有し、現世の苦悩から解放されることを目指す宗教実践の一形態（阿弥陀仏のお名前を唱えること、すなわち念仏）を命じるものである。こうしたメッセージからすれば、可能な限り現世から速やかに脱出することを除けば、現世に起こっていることへの関心が存在する余地はないであろう。とは言え、浄土については複数の解釈があり、とりわけ親鸞の教説に基づく解釈では、エコロジ的な意識や行動を基礎づけられるという側面をあまり強調せず、信仰者の関心を現世における阿弥陀仏の慈悲に向かわせることになる（Date 2012² Barnhill 2010 参照）。

様々な仏教の伝統、あるいはキュングの上掲の言葉

を使えば、様々なパラダイムにわたって、精神的な修行に関してはそれぞれに異なった指針を有しているものの、「苦悩からの解放」にせよ「覚り」にせよ、「涅槃」にせよ「浄土への往生」にせよ、究極の目的と見なされるものを個人が実現することに専念しているため、「環境」に対する如何なる関心も陰に隠れがちである。これ以外にも、同様の方向性にあるものとして指摘される多くの特徴があり、これらによって、仏教がエコロジー的な意識に対して示してきた実績には、多くの不満が感じられることになる。

エコロジー的な意識や行動に親和的な特徴

何世紀にもわたる、様々な地理上の領域にまたがる仏教の発展の道筋をたどると、上述とはやや異なった仏教の他の側面も見出される。つまり、エコロジー的な意識に資する要素も見つかるのである。それらは、我々が今日置かれている生態学的環境に対して仏教が貢献できるものの基礎となりうるものである。

既に他の学者や実践者によって指摘されている、こ

うした要素の幾つかを挙げてみよう。

たとえば、ランベルト・シュミットハウゼン博士は、仏教の後期の段階の文献では、植物が知覚を有することは明確に否定されているが、初期の段階では植物が或る程度の知覚を有するものと見なされている点を注意している (Schmithausen 1991)。植物にも知覚に準ずるものがあるという、この見解は、自然世界に対して、肯定的でエコロジーの点から健全な態度や行動をうながしている。著名な例は、タイにおいて社会活動を行っている上座部仏教の僧侶たちが採っている戦略である。彼らは環境破壊から樹木を保護するため、危険にさらされている樹木に授戒を行っているのである。

大乘仏教の中心的概念である「空」は、しばしば「空虚」と訳されるが、ニヒリズムや世界否定的な立場のメッセージというよりは、実際のところは、森羅万象の複雑な相互関係・相互連関についての仏教の洞察を表明するもう一つの仕方なのである。このことは、この概念を解説する多くの著作で反復されている命題である。とりわけ、ベトナム出身の仏教指導者ティク・ナット・

ハーンは、現代社会に向けてこの洞察に光を当て、このメッセージを伝えるために「相互存在 (Interbeing)」という言葉を作り出した人物として際立っている。

大乘經典の『華嚴經』は、この万物の相互連関ということを中心とした、実在のヴィジョンを提示している。このヴィジョンは、中国に伝播し、その地で華嚴宗を通じて彫琢されたものであり、自然との一体性と調和という感覚を基礎づけている。このような、相互に連関し合った網状体として現実を見る見方は、地球共同体に対してエコロジ的に健全な存在の仕方についての仏教的なヴィジョンを鼓吹し基礎づけている。こうしたヴィジョンは、現代の哲学的・科学的な世界像とも共鳴するものである (Macy 1991)。

『法華經』の教説には、「エコロジに」肯定的な立場が見出だせる。それは、あらゆる苦悩と労苦のただ中にある、この地上世界(娑婆世界)が、釈迦牟尼仏の不断の慈悲の振る舞いが発揮される場所に他ならないというものである。これは、世俗的な現実に対する関心と能動的な関与を基礎づける宗教的な世界像である。

この命題は、『法華經』が理想的な仏教信仰者としての菩薩の概念を強調していることと相まって、この地上にいる同朋たちの苦しみを和らげるため行動するよう奮起させるものである。この立場からは、生態系破壊の泥沼に落ち込んだ我々の同朋である生き物たちの痛みと苦しみに対する感受性が養われ、さらには、エコロジに関わる生き方と戦略的な行動が鼓吹される可能性がある。

長い歴史を通じて登場してきた仏教の様々なパラダイムの中からは、エコロジ的な意識を支え、エコロジ的な生き方と行動戦略を鼓吹する、他の多くの特徴が取り出せる。『仏教とエコロジ』(Tucker and Williams 1997) 所収の多くの論文は、こうした路線に沿った考察を提示すると同時に、仏教にもとづく建設的な考察の素晴らしい実例を提供している。同様に、この観点から我々に貴重な資料を提供しているのは、同僚同士であるステファニー・カーザとケネス・クラフトの『法の雨』(Kaza and Kraft 2000) とリチャード・ペインの『どれほどあれば十分なのか? 仏教・商業主義

と人間の環境」(Payne 2010)である。

様々なパラダイムの仏教に属する信者や実践者たちが地球の生態学的危機に対して鋭敏な意識を持つようになるにつれ、彼らは自らが尊重する伝統を調べ、「あなたたちの仏教の実践形態がエコロジ的な意識とどのように関係するのか」という問いに答えるための情報資源を探るよう求められることになった。グローバルな生態学的状況に対応するためのインスピレーションと指針に対して意義があり、それらに貢献するような仏教のヴィジョンと実践を、自らに対して明確なものとし、体得するという、この課題に、仏教の信者・実践者から成る諸団体は直面しているのである。

グローバルな *dukkha* (苦) 理解

生態学的危機によって生活に悪影響が出ている人々の苦悩と苦痛を目の当たりにすることで、グローバルな生態学的状況に見られる難問に対する意識は、高められたり、危機感に駆られたりするであろう。たとえば、地球のどの地域であれ、原住民の人々の共同体や、

村落住民の家族のもとを訪れ、「グローバリゼーション」と呼ばれるものによって、彼らの住居や暮らし、文化、さらには生存そのものが脅威にさらされている様子を目撃する。また、それらの地域に住む人々の親密な家族や友人のうちの誰かが、疾患(例えば癌)になったり、呼吸不全や先天性異常が起こったりして、その直接的ないし間接的原因が環境中の有毒物にさらされたことにある。あるいは、子どもの頃に楽しんだ蛙の歌が、蛙その他の多くの動物の生存状況が悪化したり破壊されてしまったため、もはや聞くことができなくなると実感する。ハーヴァード大学の生物学者E・O・ウィルソンの近著『生命の未来』(Wilson 2002)や、ワールド・ウォッチ研究所の年報その他といった、誰にでも入手可能な様々な資料を偏見のない素直な目で読むと、納得できる。そうした資料は、心が平静になったとき、問題は「どこか他のところ」にあるのではなく、自分たちの生活の場そのものに影響を及ぼしていることを、つまり、それが「苦」であることを、啓示するだろう。そうした状況のもとでの生き物たちの苦が、我々自

身の苦と同じように痛切に感じられる時、「どうしてこんなことが起こっているのか」という疑問が湧き起る。真摯にこの疑問を問い、切迫感を持って追究するなら、慣れ親しんだ生き方は疑問に付される。このことによってその人が引き込まれる探究は、現象的存在の「苦（不充足感）」に気づいた時、ガウタマ・シッタールタによって始められた探究に類似したものである。

それ故、このエコロジー的なレベルでの「苦」の実存的体験は、仏教的エコロジーの教学にとつてのダイナミックな基盤である。ここで私は、こうした作業が遂行されるための枠組みを示唆するにとどめたいと思う。この作業は、この体験と認識を共有するようになった我々の共同作業である。

私が考えている枠組みは、ブッダ自身によって提供されたものである。伝承によれば、彼は「転法輪経」という説法の中で、自らの覚りの体験の本質を最初の信奉者たちに解き明かした時に、この枠組みを示している。説法の中で、ブッダは四聖諦という治療プログラムを提示している。

我々の生態学的不調に現れた「苦」について敏感になることは、四聖諦の第一のものを体得することである。こうした「苦」の（諸）原因を探索することは、「四聖諦の」第二のものを体得する道を整備する。この点で、人間存在の悲慘をもたらず根本の原因である三毒（貪・瞋・癡）に対する仏教の洞察は、我々のグローバルな生態学的病いに対する社会的・経済的・政治的な、要約すれば、多分野横断的な分析に結実させることができる。この作業には、様々な専門分野の人々を巻き込む共同作業に匹敵するものが要求される。

我々は、こうした種類の分析は世界各地の様々な集団や個人によって既に行われているということを知る必要がある。この共同事業に於いて、何が仏教者の貢献できることであろうか？ 簡単に言えば、我々人間が置かれた状況に対するブッダの洞察と、それが我々の共同のないし協働的な在り方に対し光を投ずる仕方とに基づく、ものの見方が、この事業における仏教者の貢献を明確化する有望な方法である（Loy 2003）。

第三の聖諦に対応するもの、すなわち、この地球共

同体の中で我々全てが求める幸福の状態のヴィジョンを明確化することは、そうした方法の一つである。ピートルズのジョン・レノンの歌にあやかれば、あらゆる生き物がこの地上で調和のうちに、相互に関連した家族として、真実に共に生きることが出来る世界を、どのように「イマジン」できるだろうか。そうした「世界の状態 (state of the world)」の明確な特徴は何なのだろうか? (訳注「世界の状態」はワールド・ウォッチ研究所の年報の題名。日本語版では『地球白書』と題されている)

こうした考察は、ユートピアを作り出すことや、詩的想像力の領域だけに属するものとして、退けられる傾向にある。それは、めざすべき理想世界として、我々の生存に関し、個人の次元でも、共同体・国家・全地球の次元でも、貪・瞋・癡にまみれた現実世界には確かに達しがたい。しかし、仏教のこの中心的な洞察と、それに基づく智慧は、二千五百年間にわたって、真正な生き方を求める者たちを鼓舞し続けてきた。それは、「この『苦』には終滅がある」という確言である。これは、この「苦」を鋭く感じながら生きている我々をも

鼓舞する希望の表明である。すなわち、この地上で共に生きるものの具体的な在り方として、「苦」の終滅を思い描いて、それをめざしながら社会的・経済的営みにたずさわることを意味する。

この点で、仏教者だけでなく、善意ある全ての人が、持続可能でエコロジ的に生存可能な地球共同体という我々共通の夢を明確に特徴づけることを求められている。この事業における我々の味方であり同伴者であるものは、様々な信仰の伝統を有する人々と、さらには、宗教から遠ざかり人生に於ける重要な要素とは見なしはいなくとも、真正な生き方を求めている人々とも、対話と協働をすることである。

この時、四聖諦の第四である、覚りに導く八正道は、グローバル・ローカル・個人の三つのレベルで我々の社会に見出される貪・瞋・癡の構造を取り除くための、個人的努力だけでなく共同体的な努力をも含む行動計画のための有望な基準線となるだろう。この点で、スラク・シワラクやA・T・アリアラトネその他のようなアジアの仏教者の仕事は、我々全てにとって重要な

指標である。我々のグローバルな病いの原因についての理解に基づき、生態学的に持続可能なグローバル社会のヴィジョンに基礎づけられた、我々の価値観や生き方の変容のための具体的な階梯を詳細に叙述すること、特に、北アメリカ・ヨーロッパ・日本といった産業化された世界の消費的な社会に住む人々に向けて、そうすることは、未完の課題にとどまっている (Kass 2004, Payne 2010 参照)。これは、西半球にいる様々な伝統に属する仏教者たちが、それぞれの伝統の情報資源から引き出された仕方、参加することを求められている課題であり、挑戦である。

我々のグローバルな生態学的病いという「苦」の共有体験こそ、この課題と挑戦を引き受けるための刺激となるし、ブッダが提示した治療プログラムこそ、そのための枠組みとなるのである。

この光に照らされて、問いは我々のもとに還ってくる。「仏教という伝統の系譜に属すると自認する人々は、今後の道筋として何を提供できるのだろうか?」と。

各自の仏教の立場を述べる上で、「どの仏教の伝統な

のかという」特定化が求められていることは、十分理解されている。と同時に、故永富正俊・ハーヴァード大学教授が、一九九〇年代初頭の仏教とキリスト教の対話についてのパネル・ディスカッションで投げかけた問いは、ここで我々にとっても参照されるべきである。歴史上、また現代のグローバルな状況の中で示されているとおり、「仏教者である在り方」が極めて多様であるなら、「仏教を『仏教』たらしめるものは何であるのか」と永富教授は問うたのである。言葉を換えて言うなら、多様さの中でも或る種の「家族的類似性」(家族ならではの似ているところ)」として同定できる、「そうだ、それがまさしく仏教というものだ」と言えるような何かが、なお存在しているだろうか?

すでに、私は或る著作の中で、このことに対して試論として応答をしようとしたことがある。その中では、初期仏教・大乘・金剛乗の經典での説明から、三宝(仏・法・僧)の基本的特徴を、その発展を踏まえて概観した。同じ著作の中で、我々が今日、「仏教」として知っている五つの主要形態(上座部仏教、チベット仏教また

は金剛乗、浄土教、禪宗、日蓮仏教または法華仏教」を論述した。これらは、我々のいる現代社会で、発展し、信者を獲得し続け、それぞれの仕方、先ほどの「家族的類似性」を示している (Habito 2006)。粗っぽくまとめれば、歴史を通じて仏教が取ってきた多様な形態の中で、仏教を「仏教」としてきたものは、「事物をありのままに」見る (如実知見の) 智慧へと我々を開く実践であると論じることができよう。「ありのままに」見るというのは、この世界のあらゆるものが複雑に相互連関しているという真実を見ることができ、それ故、そうした智慧は全ての存在に慈悲を向ける生き方へと展開するのである。

本稿の残りの部分では、この智慧の涵養へと向かうとともに、エコロジーの分野に具体的に関与していくエコロジー的な意識を基礎づける、仏教的実践の形態を考えてみたい。

仏教的実践の領野…その概要

この結論部分では、我々の生態学的病いに立ち向か

うという課題を担いうる仏教的実践の領野を輪郭づけたいが、私が強調したいのは、これらは単なる輪郭に過ぎず、様々な実践を担う共同体の中で、さらなる考察と展開がなされることを望みたいということである。

最も広く知られた仏教の形態は、瞑想の実践を含むものである。それはヴィパッサナー (観) であるか、禪であるか、あるいはチベット仏教のものである等の様々な形態として現れる。仏教の瞑想修行になじんでいない人にとって共通する印象は、それは自我中心的な「自己陶酔」となりがちであり、修行者を現実世界から隔離する傾向がある、というものである。仏教の瞑想を説明する書物は無数にあるが、それらはただちにこうした類の印象を払いのけ、瞑想は個人の関心を世界に背を向け内向させるような独我論的な実践ではないことを保証してくれる。むしろ、しかるべき指導を受ければ、意識の奥底に入り込み、この世界にあるあらゆるものと自らが密に相互連関していることを確然と発見することができるのである。

あらゆるものとの密な相互連関を明らかにするには

様々な方法があるが、ここで私はその中の一つだけを提示したい。十三世紀日本の道元禪師は、我々の時代の多くの者にとって禪の修行を導いてくれる頼りになる存在であるが、彼は『正法眼蔵』の一節で、この相互連関の世界を一瞥している。「あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なり」（訳注「即心是仏」巻、水野弥穂子校注『正法眼蔵（一）』（岩波文庫）一四八頁）。私は、以前の著作で、道元のこの一節に若干の検討を加えたことがある（Habito 1997）。ここでは、瞑想修行の結果、「山河大地」等々との密な相互連関を体験として実感できることだけを注記しておきたい。こうした実感は、傷ついた地球を癒やす上で、ヴィジョンを与え、能動的に関与する力を与える源泉となるだろう。なぜなら、森林を剥ぎ取られている山々や、汚染されている河川、多くの地域で生態学的荒廃を被って痛みにあう回っている大いなる地球といったものの痛みを実感するからである。

阿弥陀仏の名をとる修行（念仏）は、一方では、現世での死の後に浄土に再生するための道と見られる

が、新しい見方もできる。それは、「浄土」を他の世界と見なすのではなく、むしろ、詩人のゲイリー・スナイダーが示唆するように「世界のあり得る形の象徴的表現」と見たり（Barnhill 2010）、「多様性における相互連関」の象徴と見たりする（Duke 2010）のである。この光に照らされた時、念仏は、この現世からの或る種の逃亡と見られるよりも、「世界のあり得る形」というヴィジョンを実現するような行動に取り組み、この「多様性における相互連関」を現実化していくことを賦活する源泉となりうるのである。

日蓮の生涯と思想に鼓舞されて、法華経の教えに従う仏教者たちの実践は、法華経の題目を唱えることに中心がある。日蓮が著作で説いているように、題目（南無妙法蓮華経）を唱える時、修行者は「一念三千」のヴィジョンを体験する機会を得る。それは、まさにこの瞬間、この身体において、世界のあらゆるものが密に相互連関していることを実感することである。このような実感の体験は、グローバルな「苦（dukkha）」の現実に対する理解と評価に結び付いている場合、そのことによ

って、エコロジー的な認識と、エコロジー的な癒やしに参与する生活を基礎づけることが十分に可能である。

仏教実践の主要な形態の幾つかが、どのようにして、あらゆる存在が相互に関連しているという智慧を涵養する道として見られ、敏感なエコロジー的な意識を成長させるヴィジョンを導いていくかという点について、私は簡略で非常に複雑な輪郭を描いてきた。上記で輪郭づけた実践形態のいずれかに関わっている仏教団体は、彼らの実践に含意されているものを具体的な詳細まで展開して、彼らの実践のエコロジー的な次元に関して十全な明確化をするとともに、我々の傷ついた地球を癒やすため、我々が属する現代のグローバル社会に変化を生じさせるような仕方ですれらを大胆に打ち出していくよう求められているのである。

《参考文献》

- Barnhill, David Landiss. 2010. "Gary Snyder's Ecosocial Buddhism," in Richard Payne, ed., *How Much is Enough? Buddhism, Consumerism and the Environment*. Boston: Wisdom Publication, pp. 83-120

Dake Mitsuva. 2010. "Pure Land Buddhism and Its Perspective on the Environment," in Richard Payne, ed., *How Much is Enough? Buddhism, Consumerism and the Environment*. Boston: Wisdom Publication, pp. 63-82.

Habito, Ruben L.F. 2005. *Experiencing Buddhism: Ways of Wisdom and Compassion*. Maryknoll, NY: Orbis Books.

Habito, Ruben L.F., 2006. *Healing Breath: Zen for Christians and Buddhists in a Wounded World*. Boston: Wisdom Publications.

Habito, Ruben. 1997. "Mountains, Rivers, The Great Wide Earth: Zen Buddhism and Ecology," in Mary Evelyn Tucker and Duncan Ryuken Williams, eds., *Buddhism and Ecology: The Interconnection of Dharma and Deeds*. Cambridge: Harvard University Press, pp. 165-176.

Harris, Ian. 2001. "Attitudes to Nature," in Peter Harvey, ed., *Buddhism*. London: Continuum, pp. 235-256.

Jackson, Roger R. and John Makransky. 2000. *Buddhist Theology: Critical Reflections by Contemporary Buddhist Scholars*. Surrey, GB: Curzon Press.

Kaza, Stephanie. 2004. *Hooked: Buddhist Writings on Greed, Desire, and the Urge to Consume*. Boston: Shambhala, 2005.

Kaza, Stephanie, and Kenneth Kraft. 2000. *Dharma Rain: Sources for Buddhist Environmentalism*. Boston: Shambhala.

Küng, Hans. 2003. "To Turn Further the Wheel of Dharma: Paradigm Changes in Buddhism and Christianity," in David

Chappell, ed., *Socially Engaged Spirituality. Essays in Honor of Sulak Sivaraksa on his 70th Birthday*. Bangkok: Sankhakes-Nagapadipa Foundation.

Loy, David. 2003. *The Great Awakening: Toward a Buddhist Social Theory*. Boston: Wisdom Publications.

Macy, Joanna. 1991. *World as Lover, World as Self*. Berkeley: Parallax Press. (星川淳訳『世界は恋人 世界は私』、東京・筑摩書房、一九九三年)

Payne, Richard. 2010. *How Much is Enough? Buddhism, Consumerism, and the Human Environment*. Boston: Wisdom Publications.

Schmithausen, Lambert. 1991. *The Problem of Sentience in Plants in Earliest Buddhism*. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

Tucker, Mary Evelyn, and Duncan Williams, eds. 1997. *Buddhism and Ecology*. Cambridge: Harvard University Press.

Wilson, E.O. 2002. *The Future of Life*. New York: Alfred Knopf & Co. (山下篤子訳『生命の未来』、東京・角川書店、二〇〇三年)

(Ruben L.F.Habito / 米・南メソジスト大学教授)
(訳・まえがわ けんいち / 東洋哲学研究所研究員)